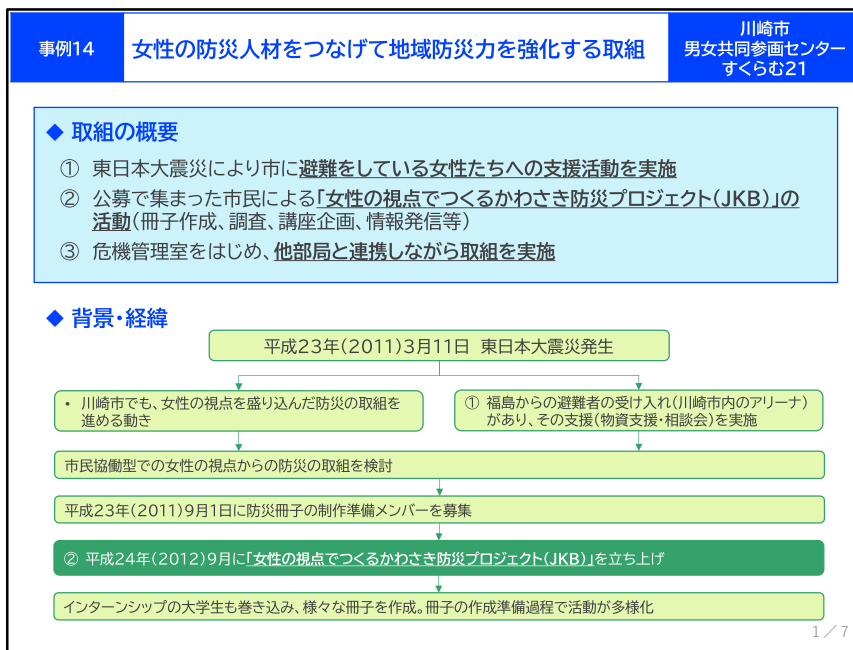




女性防災人材をつなげて地域防災力を強化する取組の事例です。

川崎市の男女共同参画センター「すくらむ21」では、平成23(2011)年3月11日 東日本大震災発生を契機に様々な取組がスタートしました。

まず、取組の概要を説明します。

【ポイント】

- ①東日本大震災により市に避難をしている女性たちへの支援活動を実施。
- ②公募で集まった市民による「女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクト(JKB)」の活動(冊子作成、調査、講座企画、情報発信等)。
- ③危機管理室をはじめ、他部局と連携しながら取組を実施。

次に、取組の背景・経緯について説明します。

【背景・経緯】

東日本大震災を契機に、女性の視点からの防災の取組を進めていこうという機運が高まりました。

その後、福島からの避難者が、川崎市の等々力(とどろき)アリーナに一時的に避難することが決まり、男女共同参画センターでは、避難者に必要な物資を提供しました。1回目は物資提供、2回目は物資提供と女性のための悩み・健康相談会を実施し、相談会では、誰が相談に申し込んでいるかが分からないようにして、一時保育付きで開催しました。相談員は、保健師や女性相談員に協力してもらい、プライバシーを守るよう別部屋を借りて開催しました。

川崎市の男女共同参画センターとして、地域で市民と共同で取り組むことを大事にして事業を推進しています。ボランティアの市民の女性たちの声を生かし、市民協働型での女性の視点からの防災の取組について考え、当時の市所管部署、関係部署の理解を得ました。

平成23年(2011)年9月1日に、防災冊子の制作準備メンバーを募集し、集まった女性の市民と事業を開始しました。市民と男女共同参画センターの職員が共にアイデアや視点を出し合って、被災者の気持ちも汲んだ、冊子を制作しました。

【女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクトの発足】

防災冊子の作成の背景として、平成23年(2011)当時、「帰宅困難になり3月11日に家に帰れなかった」、「家族がいて、子どもがいて、という中で、どう自分の生活を考えていったらいいのか」、「防災は非常に身近な問題であるということが分かってきた。」などの声を多く聞きました。(冊子の作成を通じて、防災に関心のある)女性たちがつながることができる事業にするため、「女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクト(JKB)」を立ち上げました。

平成18年(2006)から指定管理者として、毎年、大学生のインターンシップを受け入れています。JKBが発足した年も、インターンの大学生たちにも防災事業に参画してもらいました。

JKBのメンバーやインターンシップ生たちと一緒に月1回程度勉強会を実施し、冊子の読者となるターゲットを決め、内容や配布の仕方、その活用などについて意見を出しあいました。制作準備の中で、講座をつくろうという話になり、講座を企画するチーム、情報発信をするチームといったように、何種類かの活動に広がっていきました。

事例14	女性の防災人材をつなげて地域防災力を強化する取組	川崎市 男女共同参画センター すくらむ21
◆ 取組内容 ① 東日本大震災により市に避難をしている女性たちへの支援活動 東日本大震災をはじめ、被災し避難生活を余儀なくされている女性のための長期的なサポートを実施 避難所(等々カアリーナ)への支援 【支援物資の募集と提供】 女性の被災者への支援につながる物資を 期間限定で募集し提供 【女性の悩み相談＆健康相談の実施】 心や体の不調等の悩みや要望について女性だけ で話せる「女性の悩み相談＆健康相談」の相 談会を避難所内で実施 女性避難者のためのほっとサロン 3.11東日本大震災で被災し、川崎市内に避難している女性の避難者のための 「ほっとサロン」を2011年12月8日より、毎月1回開催 - 女性同士の交流の場 - 今のこと、これから先のことなど悩みや 困りごとを共有できる場 - あなたがあなたらしくいることを 大事にする場 東日本大震災から10年、 東日本大震災で避難している 女性のためのほっとサロン はじめての方も大歓迎です。  ▲「ほっとサロン」の様子 2013年9月  ▼「ほっとサロン」の様子 2012年4月		

すくらむ21で実施したそれぞれの取組について説明します。

①東日本大震災により市に避難をしている女性たちへの支援活動

東日本大震災により川崎市内・市近郊で避難生活を余儀なくされている女性のための支援活動を継続して行っています。

【ポイント】

- 女性の被災者が自分らしく過ごすことができ、避難生活の中で少しでも心の負担を軽減できるよう、支援につながる物資を期間限定で募集し提供。
- ボランティアの方々と協力して、心や体の不調等の悩みや要望について女性だけで話せる「女性の悩み相談＆健康相談」の相談会を避難所内で実施。
- 川崎市内に避難している女性避難者のための「ほっとサロン」を毎月1回開催。

【取組】

[避難所(等々カアリーナ)への支援]

- 市内を中心に市外、県外の女性から頂いた合計4711点(平成23(2011)年6月1日～6月26日17:00到着分)の支援物資を、ボランティアの協力を得て仕分け、避難所へ届けました。
- 東日本大震災により避難生活が長期化する中、女性に配慮した支援が必要になっていました。避難生活で我慢したり遠慮して言い出せない女性の被災者も多かったようです。

[女性避難者のためのほっとサロン]

- ほっとサロンは「女性同士の交流の場」「今のこと、これから先のことなど悩みや困りごとを共有できる場」「あなたがあなたらしくいることを大事にする場」として実施しています。はじめての方も大歓迎で、参加できるときに気軽に来ていただけるようにしています。
- 復興支援を目的として、避難者サロン主宰で年1度の「すくらむ21 まつり」に出店(手作り雑貨、わたあめ販売のほか、バザー用品を集めて出店)もしています。

【参考】

[女性被災者支援物資の提供]

- 6月28日、7月20日の2回、川崎市内の避難所へ提供いただいた物資を被災者の方々へ直接お渡しし、必要なものを選んでいただきました。
- 数多くの物資の中でも特に生理用品、生理用ショーツ、コットン、化粧品、汗ふき取りシート、制汗スプレー、赤ちゃん用オムツ、おしりふき、幼児・こども服、女性用の下着(カップ付の下着、ブラジャー、ショーツ、ガードル)、女性用の服、靴下、髪留め、鏡、化粧品ポーチなど私たちの募集品以外にもいろいろな配慮の上で、提供いただいた新品の品々に集まった女性たちから感謝と喜びの声を多数いただきました。

- 参加者の声(一部)
 - ✓「生理用のナプキン、コットン、オムツは居住スペースの女子トイレに共有用としてダンボールごとをもって行って設置したい。毎日、毎月必要となるものなので、共有して大事に使います。」
 - ✓「自分たちの日常には当たり前にあったが、緊急度は低い日用品(鏡)や化粧品などは不足していて、特にサイズの合う下着類や生理用のショーツのようなものは買えなかったから、提供いただき、うれしい。」
 - ✓「自分たちにとってあったらいいなというものはいつも後回しになる。もらう立場からほしいとも言い出せないし。子ども用の服も汚れたり洗いかえ用にとズボンや服もほしかった。非常に有難いです。」

[女性の悩みの相談会 & 健康相談会]

- 頭痛、吐き気、生理不規則、不眠、些細なことでイライラ、将来への不安、子育ての悩みなどのほか自分の気持ちを聞いてほしいという方が参加され、30分から1時間程度、専門家が必要に応じて、お話を伺いました。

[ほっとサロン参加者の声](一部)

- ✓「地元に行ったら食材も安く、お米はつくっていたので買ったことがなかった。都会暮らしは一つ一つお金がかかるので、戸惑いがある。高齢になってから、他の場所で生活するとは思わなかった。サロンを通じてお米の支援があり嬉しい。」
- ✓「クラスメイトに会えるとは思っていなかったのが本当に感激。この場があってよかった。長引く避難生活の中、ふと「なぜここにいるのだろう」と思う時もある。このサロンに来て友達ができた人もいる、貴重な場になっている。」
- ✓「サロンに参加してから就職活動を始めた。ここでは自分を大事にできる場がある気がした。」

事例14	女性の防災人材をつなげて地域防災力を強化する取組	川崎市 男女共同参画センター すくらむ21
◆ 取組内容 ② 公募で集まった市民による「女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクト(JKB)」の活動 【プロジェクトで大切にしていること】 ● 1人ひとりが防災の主体であり続けること、自助力を高めていくために取り組むことを活動の基本にする。 ● 取組を通じて、女性のエンパワメントにつなげ、地域の女性の防災リーダーを1人でも多く増やしていきたい。 活動1 防災に関する調査活動・冊子の作成 【女性の視点でつくる防災冊子 (シニア版、女子版)】平成25年3月発行  災害時に声をあげにくいとされる一人暮らしの女性を対象とした防災冊子を作成。現在は、配布終了。 【女性の視点でつくる防災「これで安心トイレ対策編」(改訂版)】 ● JKBのメンバーが、トイレに関する 防災講座を企画する際に、調査の過程でわかったことをまとめた冊子 ● 水道局や環境局、各部局にも確認を取りながら進めた 【冊子ダウンロード】 すくらむ21HP： https://www.scrum21.or.jp/disaster_prevention/jkb/ 		

②公募で集まった市民による「女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクト(JKB)」の活動

【ポイント】

- 避難者の声や支援者から学び、女性の視点からの防災まちづくりを進めるため「女性の視点で考えるかわさき防災プロジェクト」を立ち上げ、活動を続けている。
- 自ら学びながら継続して地域の防災力を高めていきたいというメンバーの思いを受け、グループ化をサポート。
- 名称は、女性の「J」、かわさきの「K」、防災の「B」で、JKBとなった。

【取組】

- 普段から生活者としての知恵を活かして、生活に取り入れやすい防災・減災の取り組みを進めることをコンセプトに防災訓練への出展やイベントの企画・実施を行っています。
- このプロジェクトで大切にしていること
 - 1人ひとりが防災の取り組みの主体であり続けること、自助力を高めていくために取り組むことを活動の基本とする。
 - 取り組みを通じて、女性のエンパワメントにつなげ、地域の女性の防災リーダーを1人でも多く増やしていく。
- 女性と男性がともに地域を守るという課題意識から、自分はどうしたらいいのか、何ができるのかを主体的に考えていくのがこのプロジェクトの役割の一つです。
- グループの規模は大きくなく、メンバーの入れ替えもあり、10人以下で推移しています。
- ボランティアグループなので、自分の関われる範囲で、得意なことを活かして活動する、という方法でやっています。

ここから、「女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクト(JKB)」の具体的な活動内容についてご紹介します。

活動1 防災に関する調査活動・冊子の作成

【ポイント】

- 防災に関する情報収集、基礎調査(ヒアリングや取材、必要に応じてアンケート調査)を実施。
- 災害時に声をあげにくいとされる一人暮らしの女性を対象とした防災冊子「女性の視点でつくる防災冊子(シニア版、女子版)」を作成。(現在は、配布を終了)
- JKBのメンバーが、トイレに関する防災講座を企画する際に、調査の過程でわかったことをまとめた冊子「女性の視点でつくる防災「これで安心トイレ対策編」(改訂版)」を作成。

【取組】

〔女性の視点でつくる防災冊子（シニア版、女子版）〕

- 特に介護経験のある方、1人暮らしの方などは、何かあったときになかなか声が上げにくいということがありました。そこで、若い1人暮らしの女性向けの冊子と、シニアの1人暮らしの女性向けの計2冊を作ろうという話になりました。
- シニアの女性に関しては、女性だけではなくて高齢の男性も、読んで役に立つものにしました。高齢者向けに大きめの字で、絵で見て分かるようにしたり、冊子のサイズやページ数、コンテンツの順序などを、いろいろな方にアドバイスを頂きながら作成を進めました。
- 「自分の命は自分で守るということを伝えたいけれど、始めから『災害は怖い、まず避難』から書くのではなく、まずは日ごろの備えからにしたほうがいい」、という意見を踏まえながら、ページを構成しました。こうした打合せを月に1回実施しました。

〔女性の視点でつくる防災「これで安心トイレ対策編」（改訂版）〕

- 災害時にはトイレ問題が深刻であり、日ごろからどう備えていくかを、水道局や環境局、各部局にも確認を取りながら、防災講座を企画し、その調査の過程でわかったことを冊子にまとめ、その冊子を講座に来た方に配布しました。様々な区から200人以上の市民の方が参加されました。

事例14	女性の防災人材をつなげて地域防災力を強化する取組	川崎市 男女共同参画センター すくらむ21
◆ 取組内容		
②「女性の視点でつくるかわさき防災プロジェクト(JKB)」の活動（つづき）		
活動2 防災講座の企画・実施		
・ 災害時の事情とその対策について、暮らしの身近な課題の解決につながるようなテーマ(トイレ、衛生、防犯対策など)を決めて、1から企画・検討し、講座を実施している ・ 高津区とJKBが共催した講座「集合住宅で災害 その時あなたは？」(平成26年1月27日開催)では、講座の内容を編集し、冊子を作成した		 【冊子ダウンロード】 川崎市高津区HP： https://www.city.kawasaki.jp/takatsu/page/0000067588.html 
活動3 情報の発信・普及活動		
メンバーが主体的に防災に関する収集した情報やプロジェクトの様子などを発信		
 ◀ 防災ニュースレター		 ◀ 防災コラム 「女性の視点で考える防災の知恵袋」 【防災ニュースレター/防災コラムダウンロード】 すくらむ21HP： https://www.scrum21.or.jp/issue/bnews/ 

活動2 防災講座の企画・実施

【ポイント】

- テーマを決めて災害時の事情とその対策について講座を企画し実施。
- 親子向けの簡単な防災講座と、大震災時のトイレに関する講座を実施。

【取組】

- 毎年、自分たちが関心のあるテーマを中心にしています。
- トイレの講座も需要があり、年に何回かは開催し、家で作れるトイレキット等の工作講座を行ったり、集合住宅での防災の対策マニュアルを作ろうと呼びかけたりしました。
- 地域で自主防災組織等の研修会や、町会の防災訓練、区や市が企画する講座やイベントへの出前講座も行っており、常にメンバーとセンターの職員が一緒に出掛けていっています。
- 例えば、トイレ、衛生、防犯対策など、ライフステージや家族構成、居住形態等により、備え方も異なりますが、身近にあるものを活かしてどのように備えればいいのか、どのような情報が必要か、メンバーが検討し、講座で紹介しています。

活動3 情報の発信・普及活動

【ポイント】

- 平成24年(2012)に、防災ニュースレターの発行を開始。
- 必要な方に、町内会の回覧や防災訓練等用に印刷して提供。

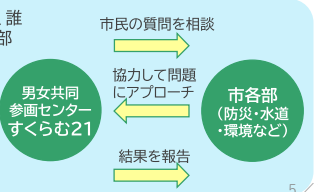
【取組】

- 災害時に男女がともに自助力を高めていけるよう、生活者の立場から身近な防災・減災への取組の必要性や取り組み方の情報を集め、発信することを目的として、防災ニュースレターを発行しています。
- 1号目はメンバーが市役所の上下水道局の担当部局に取材し、上下水道の耐震化や、マンホールトイレ等を調べて作成しました。
- メンバーは、自分たちの身近にあるものを使ったり、ライフスタイルに合わせて防災活動をおこない、それを長く続けていこうという思いでやっているため、具体的な対策への問題意識が高く、メンバーが知りたいテーマを中心に、ニュースレターも作っていくことになりました。

【参考】

[市との連携]

- 市民からの防災対策への気付きや気になることをフィードバック・発信する取組を行っています（流さないトイレ等）。
- 女性の市民が調べて思ったこと、生活者としての気付きを、「備えるかわさき」という市が作成する防災啓発広報誌にも一部、反映していただきました。
- 市の他部局に取材したり、違う取組をしている地域を訪問したりして、その中で学んだことをニュースレターで発信することを熱心にやっていました。

事例14	女性の防災人材をつなげて地域防災力を強化する取組	川崎市 男女共同参画センター すくらむ21
◆ 取組内容		
③危機管理室をはじめ、他部局と連携しながら取組を実施		
危機管理室との連携	 【冊子ダウンロード】 すくらむ21HP： https://www.scrum21.or.jp/issue/operation_guide/ 	
「避難所運営マニュアル～地震災害対策編～」の改訂（川崎市総務局危機管理室 平成26年4月1日）にあわせて、「男女共同参画の視点でつくる避難所運営ガイド」（右）を作成（市民向けの講座も一緒に実施） - 危機管理室にページ構成や内容を相談しながら作成した - すくらむ21が実施した防災に関する1年間の取組報告書を、毎年、危機管理室に提出している		
市各部との連携		
- 危機管理室に「市民から〇〇について質問が出ているので、誰に連絡したらいいか紹介してください」と頻りに連絡し、他部局を紹介してもらう等、関係づくりをした - 男女共同参画に理解のある職員から情報収集し、意見交換の機会を持つことを繰り返し実施した - やったこと（結果）を紙面にまとめ、逐一報告した - 職務関係者への研修を年2回程度実施している		

③危機管理室をはじめ、他部局との連携

危機管理室をはじめとして、川崎市の他部局と連携を意識して取組を進めています。

【ポイント】

- 「避難所運営マニュアル～地震災害対策編～」の改訂（川崎市総務局危機管理室 平成26年4月1日）にあわせて、「男女共同参画の視点でつくる避難所運営ガイド」を作成し、市民向けの講座も開催。
- ガイド作成時に、危機管理室にページ構成や内容を相談しながら作成。
- 危機管理室を通じて市各部（水道局や環境局等）と連絡を取り合い、市民からの質問や問題解決のアプローチを考えるために的確な情報を教えてもらい、関係づくりをした。

【取組】

[危機管理室との連携]

- 冊子は、川崎市の総務局危機管理室が公表（平成26年（2014）.4.1）した「避難所運営マニュアル～地震災害対策編～」と併せて活用する構成となっています。
- 防災に関わる事業の取組を報告書にまとめ、毎年、危機管理室に提供しています。
- 市民向けの講座も危機管理室に協力してもらい実施しています。職務関係者にも勉強会などを一緒にしたいと考えています。

[市各部との連携]

- 川崎市は、市民文化局の中に、人権男女共同参画室があります。その中に男女平等推進施策の担当部署があり、川崎市男女共同参画センターの所管となっています。一方で、危機管理室が総務企画局の中にあるので、総務企画局とも連携しながら事業を進めています。
- 自分たちが男女共同参画の視点で事業をしていることを、当然のように分かってもらうのは難しいと思います。連携する部署の方には、「思いを持っている市民と一緒に応えてほしい」と伝え、理解のある職員から情報をもらい、意見交換の機会を持つことを繰り返してきました。
- 結果を紙面にまとめ、各部局に逐一報告し、見てもらうように心がけました。市民レベルでの企画を発信し、方向性を示しながら企画を練り上げていくプロセスを見せることで、よかったら見に来てくださいというスタンスで関係をつくっていきました。
- 男女共同参画センターと市民グループや事業者などとの協働事業の中で、職務関係者などを対象に「男女共同参画の視点からの防災」に関する研修を行っています。危機管理室の室長のご理解があり、若手の職員の方や市の社会福祉協議会、市民活動センターの方にも呼びかけをしていただきました。このような機会を年2回程度作っています。
- 第1部では市民と一緒に広く勉強し、第2部で職務関係者だけを集めて短時間ですがワークショップを行いました。その後、交流会も開催し、普段、自分が担当している所で災害時の対応で困っていることや、課題などを出し合いどうしたらいいかという話を、講師を交えて行っています。

- 顔が見える関係で、お互いの考えを知ることは、すごく大事だと思います。書類や電話だけのやりとりだけではなく、社会福祉分野の職員の話を防災担当の職員が直接聞く機会を持つなど、いろいろな分野に男女共同参画の視点が入ることが大事です。ワークショップには男女が同じぐらいの比率で参加していたので、いろんな考え方を知る機会になったと思います。
- 男女共同参画とは何かを十分に理解できていなければ、男女共同参画の視点を入れたマニュアルを作ることはできないと思います。私たちから積極的に、この部分はこういった表現にしてほしいということ伝えていくことは、必要なことだと思います。

【参考】

[避難所運営ガイドについて]

- 避難所運営マニュアルを補完するものとして、男女共同参画がどういうものを説明するガイドを用意することが、私たちが役割を発揮することにつながると考えました。
- 市が発信する情報になるべく男女共同参画の視点を入れていただきたいという思いがあるので、改訂や作成のタイミングを見計らって危機管理室にアプローチしています。

事例14

女性の防災人材をつなげて地域防災力を強化する取組

川崎市
男女共同参画センター
すくらむ21

◆ 現在の活動

シニアシングルサバイバル読本(令和2年2月発行)の作成



- ひとり暮らしの高齢者が増加している実情を踏まえ、女性の視点に立って、ひとり暮らしのシニア向け防災・減災冊子をまとめた
- 「女性に対する暴力」は被害者ではなく、加害者に問題があることから、「過去の災害に女性や子どもに向けて加害があった」という表現にした

【冊子ダウンロード】

すくらむ21HP：
https://www.scrum21.or.jp/disaster_prevention/gender/



リーダー養成研修で行う「KAWAHUG」

- 危機管理室と一緒に、各区を回り、自主防災組織のリーダー養成研修を実施。そこで、すくらむ21も参加して男女共同参画の視点を入れた防災研修を実施している。
- 川崎のオリジナル版HUG(KAWAHUG)の解説の中で、男女共同参画の視点を交え、どういう問題があるのかについて、解説に力を入れている。

リーダー養成研修に参加したメンバーを対象に、
女性の防災ネットワークを作っていきたい

JKBのパートナーになるような、
地域防災活動をする女性たちの
つながり作りを後押ししている

6 / 7

すくらむ21の現在の活動です。

【ポイント】

- ひとり暮らしの高齢者が増加している実情を踏まえ、女性の視点に立って、ひとり暮らしのシニア向け防災・減災冊子としてまとめた「シニアシングルサバイバル読本(令和2年2月発行)」を作成。
- 危機管理室と一緒に、市内の各区にて、自主防災組織のリーダー等養成研修を開催し、男女共同参画の視点で年間を通じて実施

【取組】

- 女性の置かれている現状を理解した上で、都市部であり東西に細長い川崎市の地域特性を踏まえながら、各区で異なるニーズを踏まえ、ライフスタイルにあった身近な防災・減災の取り組みを市民とともに進めています。
- 現在は、JKBメンバーをはじめ、地域の女性防災士や自主防災組織の男女のリーダーの方々の協力・連携によって活動内容の充実に努めています。
- 災害時における避難所での労働、心身の負担の軽減やその後の生活の再建や就業課題、またそれぞれの過程での人権が尊重される状態を確保していくために必要な取組について検討しています。
- 男女共同参画の視点を持った男女双方のリーダーが増えていくために、情報提供を含む防災訓練や避難所開設訓練への協力や出前講座等へ積極的に取り組んでいきます。

[シニアシングルサバイバル読本]

- 冊子を作成するにあたり、平成30年(2018)度から令和元年(2019)度の2年間でひとり暮らしのシニア、介護関係者、20代～70代の参加者とワークショップを通じて検討した内容も踏まえ、JKBメンバー、防災士・上園智美さん、川崎市の危機管理室の協力を得て、作成しました。
- 現在シングルであっても、また、そうでなくても、働き、暮らし、生きている方が、尊厳をもって人生を全うできる、自分らしく生きることができるよう、いざという時に受けるダメージを小さくするためのヒントを見つけて、実践してほしい、そういう願いがこの冊子には込められています。
- 女性に対する暴力について、「女性が被害者である、被害者が身を守るためにどうしたらいいか」ではなく、加害者の問題として捉えられるように、この冊子では、表現の仕方に気を付けました。男女共同参画の視点でどのように表現されているか、気を付けないといけないと思っています。

[リーダー養成研修で行う「KAWAHUG」]

- 川崎のオリジナル版HUG(KAWAHUG)の実施後の振り返りで、男女共同参画の視点から見て、どういう問題があるのかと、その解説に力を入れています。
- リーダー養成研修に参加していたメンバーを対象に、女性の防災ネットワークを作っていこうと考えています。JKBのパートナーになるような地域で防災活動に取り組む女性たちのつながり作りを後押ししています。女性の防災リーダーは少ないので、危機管理室の協力を得て、勉強会に取り組もうとしています。

6

事例14	女性の防災人材をつなげて地域防災力を強化する取組	川崎市 男女共同参画センター すくらむ21
◆ 取組のポイント ✓ 理解してほしい側にいる「市民」とともに女性の視点に立った防災のプロジェクトを作り上げた ✓ 地域で防災に取り組む女性たちのつながり作りを後押しした ✓ 危機管理室や他部局に質問、報告等を積極的に行い、顔の見える関係を作った		
【担当者のメッセージ】 日ごろのセンターの事業活動を通じて、様々な分野で活躍されている方と顔の見える関係をつくり、情報を提供いただいたり、提供したり、地道なかかわりの積み重ねを大切にしています。		
団体の概要 問い合わせ先	川崎市男女共同参画センターすくらむ21 〒213-0001 神奈川県川崎市高津区溝口 2-20-1 TEL : 044-813-0808 https://www.scrum21.or.jp/	

「川崎市男女共同参画センターすくらむ21」による男女共同参画の視点からの取組ポイントは、この3点です。

- 理解してほしい側にいる「市民」とともに女性の視点に立った防災のプロジェクトを作り上げてきた
 - ・ 市民とともにどうすれば市民に伝わるか、どういうところが市民にとって疑問なのかを考え、作りあげたものを実際に使いつづけることで、地域の人たちに理解してもらえるものになります
- 地域で防災に取り組む女性たちのつながり作りを後押ししてきた
 - ・ 女性たちが思い、感じていることを吸い上げながら、防災に関心のある女性たちのつながりを後押しする立場で男女共同参画センターが関わってきました
- 危機管理室や他部局に質問、報告等を積極的に行い、顔の見える関係を作りあげてきた
 - ・ 災害対応に関わる様々な市の部局に対し、積極的に相談に乗ってもらい、教えてもらいながら、取り組んだことを最後には報告するなどして、研修や交流の機会をつくることで顔の見える関係を作ってきました

【担当者のメッセージ】

日ごろのセンターの事業活動を通じて、様々な分野で活躍されている方と顔の見える関係をつくり、情報を提供いただいたり、提供したり、地道なかかわりの積み重ねを大切にしています。

【参考】

[男女共同参画センターの関わり方]

- ・ 男女共同参画センターとして防災に取り組むにあたって、市民が、防災だけではなく、男女共同参画の視点も身近に獲得してもらうことが大切です。
- ・ 表現の仕方は、わかりやすく、丁寧に地道にやっていく必要があると思っています。

[市民とともに作り上げる]

- ・ 例えば、避難所の運営では、「物資提供の際に、こういう問題が起きていました。その解消のために必要な訓練を避難所運営会議へ提案する際に、この冊子を使ってください。」というアプローチをしています。要するに、説明できる資料が必要です。
- ・ 市民と一緒に作ることで地域の人たちに理解してもらえるものになると思います。

[継続して防災に取り組む理由]

- ・ 男女共同参画の視点は、様々な領域に関わりますが、特に男性が多くを占める町会などの組織を担う人たちの意識が変わっていくことは、すごく大事です。日常生活により近いところで男女共同参画の視点で発信し、そこに触れていただくために、防災は良いテーマだと思っています。出前講座のニーズも、防災をテーマとした依頼は比較的多いです。
- ・ 長い目で見ると、ジェンダーに関わる問題が地域でまだまだ解決していないため、センターの活動が分かっている人を増やさなければ、地域に浸透していきません。

[今後の課題・取組]

- 一緒に自分事として捉えていただける男性への働きかけは必要なので、自主防災組織との連携は継続していく必要があると思っています。
- 男女共同参画が「分野」だと捉えると1年で終わってしまいますが、「視点」だとすると、もっといろいろなアプローチがあると考えています。
- 生活に身近な具体的な取組を通じて発信していくことが、事業を長く続けていく肝だと思います。
- 防災を、特別な知識があり専門的に業務に当たる方が取り組むものだと捉えてしまうと、敷居が上がってしまうように思います。性別や年代を超えて、わかりやすい言葉で、身近なこととして情報をいかに伝えられるかということが大事だと思っています。女性同士の関係だけではなく、男性も含めた地域の輪の中で、気になることを口に出して発信できる関係づくりが進んでいくと、災害に強い地域になっていくと思います。